

其	四〇、四〇〇	六二、二五〇	三〇、五〇〇
計	六七、四七〇	四六、二五〇	四三、一五〇
合	三三二、四七七	二七九、四四五	二、八三三、五七六

新刊紹介

○ 最近の地震學

松山基範著

大正十四年八月

菊版三三四頁 發行所 大阪毎日新聞社

定價三圓二十錢

大正十二年の大震災後今村明恒博士のと中村左衛門太郎博士との著があつて我等は地震學の新しき知識を得ることが出來たが、今又松山博士の本著を獲て知識欲を満たさすことを得るに到つた。本書單を分つこと十一、地震の起る場所、地震の起る時、前兆及餘震、地變、地震の調査、地震計、地震動の性質、岩石の彈性波、地震の波動、地球内部の構造の研究に於ける地震の質狀及地震の原因の題下に地震に關する略あらゆる事項を網羅してゐる。記述の仕方を窺ふに、從來地震學者によりて調査された事柄及結論された所を記述すると同時に穩健な考察で批評して學者の説明に對する適當な考察を教示されてゐるのは著しいことである。も一つ本書の良著である所以は地震動の性質以下の數章に於て地震波の物理學的解釋を試みてゐる處にある。而して其の内には志田博士によつて展開された初動の引きと押しとの配置から起震裂綫の状態を明にすることが出来る物理學的説明を與へた邊に本書の記述がカルミネートしてゐる様

に見受けられる。要するに本書の主要點は地震の物理學的研究方面にある。従つて地震動其自身について妥當な説明を求めんとするものに取り甚だしく有益な良著である。本書には附するに關東大地震の性質及但馬大地震の研究の二篇を以てしてゐる

○ 第四版英和和英地學字彙 (東京地學協會)

本書は故原田豊吉先生等の地質調査所在勤の頃編纂に着手された稿本が濫觴を成し、前後二十餘星霜を経て大正三年に前所長井上禮之助氏の監修完成して第一版刊行を見たもので、調査所及び東京地學協會で邦文に地學術語を翻譯して使用する必要から生れ、當時その譯語の選定には頗る苦心を経たる所である。この編纂に與つたものには今尚ほ穩妥を缺く若干の譯語あるを免れぬ事情を體知してゐるが、地質調査所を中心として發達した地學智識の傳播の歴史を語るかに感ぜられる。網羅する所は地理地質礦物岩石古生物等の諸科に關する術語約五千語を數へ、英和和英の兩對譯にして、和英は羅馬字綴り邦音により檢索を便にし卷末に地質時代、礦物、火成岩の三分類表を附録として添え總頁數三三〇頁、清楚のクローズ小冊子で、大震災後久しく絶版となつたのが今回漸く再び訂正第四版の刊行を見、斯學研究者の不便が救はれた。斯學に従事するもの、座右に缺く可らざる袖珍の好書たるは多言を要せぬ(定價三圓五十錢)

○ 日本國誌資料叢書

四六版 武藏 頁數 一〇九六 大正十四年六月 定價 五圓
攝津 頁數 七七〇 同年 九月 定價 四圓

大田亮著 東京 磯部甲陽堂發行

河内 頁數 四六二 同年 十一月 定價二圓五十錢
和泉 頁數 三〇二 同年 十一月 定價一圓八十錢

地球第三卷第五號に大正十四年の春までに出た本叢書を紹介して置いたが、其の後續々として此の好著が公にされて地方の人々の歴史地理に關する好學心をそゝるのは何より嬉しいことである。是にも本叢書は歴史人文地理の倉庫だと云つたが武藏や攝津が龐大な分厚な一書を成してゐる。著者が氏族制度を調査する爲に採録したものであるから武藏の如きは其の過半は氏族の篇に毀されてゐる。ともかく歴史地理學愛好家が本叢書を充分に利用されることが望ましい。

○地形圖及地質圖解説

デーク及ブラウン著

C. L. Dake and J. S. Brown—Interpretation of
Topographic and Geologic Maps. 1925 Mc Graw
Hill Book Co. New York. 丸善賣價七圓五十錢

地形圖がよく讀めれば遂にある程度までは内部の地質構造までが考察され得ると云ふ最近の考から書かれたもので前篇は地形圖の解説、後篇は地質圖の解説に當てられ總頁數三五五頁ある。地圖を挿入して居ないで参照として北米合衆國の地形圖葉名を列擧して居るに過ぎないのは遺憾であるが、もと合衆國地質調査所のプロフェッショナル・ペーパーとして出版された浩瀚な地形圖解説には等高線から地質構造を讀むこと及地質圖解説が缺けて居つたのを本書では之等の解釋に力を入れて居るのが著しい。實際地圖を讀んで地質及地質構造を明にせんとす

るのは室内野外教課である。日本の地形を基礎としてかゝる著書の出ることが望ましい。

○大正十四年 京城附近に於ける漢江氾濫調査報告文

立岩巖、島村新兵衛、田村龜太郎、山澤三造共編（朝鮮地質調査要報第五卷ノ一）大正十四年十月朝鮮總督府地質調査所發行

昨年七月中旬の漢江汎濫は稀れに見るもので龍山元町に於て最高増水位は約十二米に達し、而して堤防其の他の築造物は破壊され多數の家屋は流失又は全壞の厄に遭ひ稀有の慘事を惹起した。本報文はこの洪水に關する地質學的觀察を記述したもので其のうち最も著しいことは浸蝕及沈積作用であつて、流水と共に各所に深き數米に達する窪地を生じた、又礫を交へた砂が厚さ三米も沈積した處がある。二十一の鮮明なコロタイプ版があり、五万分一漢江汎濫圖が添附されて居て流水の方向や浸水區域やが表はされて居る。猶二万五千分の一の詳圖も引續き印刷中とのことである。かうした地學上目撃される天然現象が起つた場合にはいつも科學的の觀察が行はれて災害豫防の根柢が作られると云ふことは我々が文化の世界に生きて居る表現である。